

2023/5/1 (月)

朝の礼拝

聖書 マタイによる福音書 6章 34節 (新約聖書11頁)

そのころ、ある安息日にイエスは麦畑を通られた。弟子たちは空腹になったので、麦の穂を摘んで食べ始めた。ファリサイ派の人々がこれを見て、イエスに、「御覧なさい。あなたの弟子たちは、安息日にしてはならないことをしている」と言った。そこで、イエスは言われた。

「ダビデが自分も供の者たちも空腹だったときに何をしたか、読んだことがないのか。神の家に入り、ただ祭司のほかには、自分も供の者たちも食べてはならない供えのパンを食べたではないか。安息日に神殿にいる祭司は、安息日の掟を破っても罪にならない、と律法にあるのを読んだことがないのか。言うておくが、神殿よりも偉大なものがここにある。もし、『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』という言葉の意味を知っていれば、あなたたちは罪もない人たちをとがめなかったであろう。人の子は安息日の主なのである。」

憐れみ

私たちに憲法や法律があるように、イエスのいたユダヤ人社会には「律法」がありました。ただ人間同士の約束だけではなく、神様との約束もありました。その中に「安息日」の掟がありました。その日は神様に感謝する日で、何もしてはいけないと決まっていたのです。

ところがイエスの弟子たちはお腹が空いて、他人の麦畑で落ち穂を拾って食べました。でもこれは盗みではありません。収穫の時に貧しい人や旅人のため、わざと落ちた穂を畑に残しておくように律法で決まっていたのです。二つの掟が衝突しています。

ユダヤ人の指導者ファリサイ人は安息日の掟の方が大切だ、それを破ったのは罪だとイエスに詰め寄ったのでした。そこでイエスは理想の王と言われたダビデも供の者たちと祭司以外は食べてはいけない供えのパンを食べたではないかと答えるのでした。

そして「わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない」と言いました。憐れみとは愛です。いけにえとは犠牲です。形だけ掟を守るような犠牲よりも互いに愛し合う姿こそ、神様が喜ばれることではないかと言っているのです。

(しばらく黙想しましょう)

慈しみ深い主よ、あなたはすべての人が互いに愛し合い、仲よく生きることを望んでおられます。どうか争いの中にあって困難な生活を強いられている人々、特にウクライナ、スーダン、シリアの人々に平安を与え、ひと時でも早く平和を迎えられますように。また連休中もわたしたちが良き体験と学びに恵まれ、心身共に休息の時が与えられますように。今日一日もすべてをあなたに委ね、喜びと感謝のうちに過ごさせてください。主イエス・キリストによってお願いいたします。

アーメン